

いきいき健康生活
鴻巣市広報「かがやき」 平成20年6月15日号 掲載
漢方治療

日本の漢方は現代中国医学と同じ起源をもつ医療です。江戸時代に先人が日本の風土・文化を取り入れて日本独自の医療へ変化させてきたものです。

昭和51年に漢方製剤（主にエキス剤）が保険適用され、多くの医師が使用するようになりました。しかし、漢方薬の使用は医師の経験則によるもので、その効果・効能に対する科学的な証明がなされていません。

そのため、近代西洋医学の科学的根拠に基づく医療が主流を占めてきました。最近、漢方薬の成分分析が行われるようになり、その効能・効果が科学的に証明されてきました。

大黃甘草湯（だいおうかんぞうとう）の大黃に含まれるセンノサイドの緩下作用、麻杏甘石湯（まきょうかんせきとう）の麻黄にふくまれるエフェドリンの鎮咳・気管支拡張作用、小柴胡湯（しょうさいことう）の甘草に含まれるグリチルリチンの肝保護作用などがそれです。

西洋薬と異なり漢方薬はいくつかの生薬を混ぜて作られているため、何が効果を発揮しているか不明な点も多くあります。それでも、腹部の外科手術後の癒着予防に大建中湯（だいけんちゅうとう）、こむら返りに芍薬甘草湯（しゃくやくかんぞうとう）などは、多くの医師が使用しています。

漢方薬は自然の薬草が主成分なので副作用がないと考えられがちですが、そんなことはありません。漢方治療では、患者個人個人の体質・病状・病期を診察・判断して漢方薬が処方されますが、その判断を間違えれば、その処方で副作用がおこることもあり得ます。

最近では、C型慢性肝炎患者に行われたインターフェロンと小柴胡湯の併用療法で間質性肺炎（かんしつせいはいえん）が発現したためその併用が禁止されました。

漢方治療は人間が生来持つ自然治癒力を助けるひとつの方法です。食生活や適度の運動を自分の体質・状態にあわせて気配りすることで健康は保たれるはずです。

発達した西洋医学と個々に優しい伝統・代替医療（漢方治療など）を統合した統合医療が理想の未来の医療になるのではないのでしょうか。